

## 第108回 奈良県産業教育審議会（要旨）

### 1 会議

- 日時 令和8年2月5日（木）13時30分～16時00分
- 場所 奈良県庁 東棟2階 教育委員室
- 出席者 審議委員：秋吉美由紀、大原敏敬、後藤景子、世良啓太、小西淳文、下村由加里、藤平拓志  
県教委：大石健一教育長、尾崎慈昭高校教育課長、辰巳理恵子総務課課長補佐、川崎崇教育改革推進係長、松浦宏、乾祐士、小西依里、下井哲也 各指導主事

○役員選出 会長に後藤景子委員、副会長に大原敏敬委員を選出

### 2 内容

- ・入試制度等の説明
- ・産業教育系学校・学科の説明
- ・審議

### 3 審議概要

- 本県高等学校における産業教育に求められること
  - ・福祉業界について、専門高校の卒業生がよく頑張っている。宇陀高校で介護福祉士の資格取得は就職してから、大きな力になるので、業界としても非常にうれしいことである。
  - ・少子化の影響が出てきていると感じている。思っていたより産業教育系の高校の就職希望者が多く安心した。今後どのようにになっていくか気になる。専門高校への入学希望者を増やすには中学校段階で専門高校のPRをすることが重要ではないか。
  - ・中学校の教員や進路指導の担当者対象に高校の説明会を行っているが、もっとたくさんの先生方に専門高校の魅力を知っていただく必要がある。
  - ・11月に実施している奈良県産業教育フェアで中学生などへ専門高校の学びを見てもらったり、体験してもらうことも有効な手段ではないか。
  - ・生徒が求める学びや社会の求める人材に対応した産業界との連携を含むキャリアイメージ、キャリアパスを確立する。
  - ・高い専門性を身に付けるとともに、応用の利く知識や技術も必要ではないか。学んできた専門の知識や技術を活用して、学んだ専門に関係のある職に就いても応用が利けば仕事ができる。応用が利くように、また応用できることを教員は生徒に伝える。このことで、進路の選択肢が増え、専門の職業人を残していくことにつながる。
  - ・専門的な学習だけでなく、キャリア教育や社会人基礎力、起業家精神（アントレプレナーシップ）を高める学習が必要ではないか。全員いずれ社会で仕事をしていくことになるので、早い段階でお金の流れや人との関わり方、協調性を身に付けることで安心して社会に出たり、学んだ専門的な知識や技術で起業するなどして価値が生まれるのではないか。スイスでは国家企画としてお金の価値について教育している。

- ・国は今エッセンシャルワーカーの育成に力を入れようとしているので、産業教育についても変えていくチャンスではないか。常識を持った専門高校の卒業生が、社会で活躍することで、産業教育の見方も変わっていくのではないか。
- ・地域との連携や産学官の連携をSNSで発信し、様々な人に学校の取組や魅力を知ってもらうことで、入学希望者が増えるのではないか。業界も同様に生徒などに魅力や仕事内容等を知ってもらう必要がある。連携の内容も一方的ではなく工夫が必要。
- ・この審議会は、教育関係の方だけでなく、様々な立場の方がおられるので専門高校で行ってほしい教育が語られることは産業教育が良くなるのではないかと思う。
- ・社会で求められる人材は、価値を生み出せる人材だが、高校生の段階で価値を生み出せる人材の育成というのは難しい。価値の意味を理解し、価値を生み出すことは難しいけど楽しくてやりがいのあるものだ気付くことで、何かやってみようという意識につながるのではないか。このような学びを高校を卒業した18歳ではなく、素直で純粋な15歳からできるということは、素晴らしいことである。
- ・様々な大学や学部で、「奈良県の専門高校を卒業した生徒は優秀だからうちの大学に入学してもらいたい」と思われるような専門高校を目指してほしい。
- ・学校の魅力は、設備や資格取得、就職率もあるが、「価値を生み出せる人材になれる」ということも新たな魅力としてあってもいいと思う。
- ・奈良県はまだまだ価値を生み出すことができる場所なので、様々な取組を行い、奈良を盛り上げてほしい。
- ・通信制高校は、主に不登校を経験した生徒の学びを支える場所と捉えられてきたが、今は積極的に選択する生徒が増えてきている。そこで専門高校は可能性を見定めて行く必要がある。コロナ禍に普及したオンラインやオンデマンドの学びについて、対面の授業よりも学びの習得が早い生徒もいるので、普段の授業とともに活用していくのもいいのではないかと思う。ただ、オンラインだけになってしまうと、人間性や社会性をどう身に付けるかが課題になる。生かすも生かさないも提供側と受け取り側次第ではないかと思う。
- ・日本の教育は、小学校から大学までほぼ年齢通り直線型に進んでいく。日本の直線型の学びを変えていこうという動きがある。海外では、早い段階で進路を考える時間があり、人生の選択を早くするとい面もあるが、後戻りできないリスクもある。専門高校でもこのリスクは少なからずあるため、専門高校のあり方を変えていく必要があるのではないか。キャリアパスを明確にし、個人の興味関心や希望、将来像に応じて多様な選択があってもいいのではないか。変える必要があると指摘のある資料はあるが、なかなか変わっていったいないのが現状である。
- ・専門学校では、入学後に「思っていたのと違う」や「できると思ったができない」などといった理由で退学する生徒がいるので、退学ではなくスイッチして違う学びもできるようにリスクヘッジを考えることも必要かもしれない。こういったことは、専門高校にも共通することではないか。
- ・インターンシップや企業とのデュアルシステムを経験した生徒としていない生徒の卒業後についてデータを分析する必要がある。学科別の県外就職、県内就職の割合や離職など。
- ・15歳からの専門教育の強みと特色は何か、すなわち、普通科から大学進学、専門学科から大学進学で育成される人材像の違い、さらに普通科からでは達成できないことは何かを明確にすることが重要である。